求められる社会との対話

WITH 社会

企業は社会と切り離された存在ではない。遊技産業もその例外ではなく、多くの社会的活動が行われている。自らが行うボランティアとして行われているものもあれば、社会的活動を行うＮＰＯや社会福祉法人への支援もある。あるいはマイナスイメージに対する業界としての回答を示したものもある。こうした社会活動を通じて、遊技産業が社会に対してアピールできることは多く、これを社会が受け止め、戻していくことで、業界はさらに洗練されていく。

信頼関係をベースに活動を展開

業界の横断的な団体である社団法人 日本遊技関連事業協会(日遊協)は2月に日遊協ボランティア団体応援基金の第6回助成について報告した。これは必要なところに必要な資金援助をしたいという趣旨から、支援を求める団体が日遊協に書類を提出、これを審査し、プレゼンテーション、面接して支援を決定するというもの。6回目に当たる今年は認定ＮＰＯ法人難民を助ける会、認定ＮＰＯ法人幼い難民を考える会、社会福祉法人さぽうと21、認定ＮＰＯ法人日本国際ボランティアセンター、ＮＰＯ法人ゆうび小さな学園、ジャパンユニバーサルスポーツ・ネットワークの6団体が支援を受けた。

このうち、5団体はすでに過去にも支援を受けていたところ。「互いの信頼関係が出てきた」と事務局でも話すように、団体からの報告など、双方向でのふれあいがある。

ボランティア団体応援基金の原資は会員各社の寄付によって賄われているため、会員にもフィードバック。カウンターなどで掲示できる資料を渡している。

メーカー単独でもショールームを地域の社会福祉法人に開放したり、清掃活動に関わったりと、地域社会との接点を増やす方向にある。

こうした活動の大きな特徴は継続。清掃活動を続けるメーカーは「近隣の人から挨拶されるようになり、それに社員が挨拶を返す。そのコミュニケーションがいい」という。

こうして社会との信頼関係が構築されていく。

店内掲示用のポスターも作成し、顧客にも情報を開示▶

日遊協ボランティア団体応援基金

第６回助成のご報告

皆様方の浄財400万円を、下記の６団体に寄付いたしました。

団体名	所在地	助成対象の活動	助成額
認定NPO法人難民を助ける会	東京都品川区	カンボジアにおける障害者のための職業訓練、アンゴラにおける地雷啓蒙教育の活動。	100万円
認定NPO法人幼い難民を考える会	東京都港区	カンボジア・プノンペン市の貧困難民住地域での保育事業（保育所新設、保育環境改善、保育者研修など）。	80万円
社会福祉法人さぽうと21	東京都品川区	日本に定住する外国出身者の生活・就労・就学支援や相談。日本人との相互理解のための交流・研修事業。	80万円
認定NPO法人日本国際ボランティアセンター	東京都台東区	アフガニスタン東部のナンガルハル県北東部地域で、おもに女性と子どもを対象にした保健・医療支援。	80万円
NPO法人ゆうび小さな学園	千葉県柏市	恵まれない子供達の学園生活を支援する「1年間ボランティア」に参加する青年の受け入れ事業。	40万円
ジャパンユニバーサルスポーツ・ネットワーク	東京都大田区	共生社会をめざし、子供、60歳以上、障害者などのリレーによるマラソン大会。その支援のためのさまざまな活動。	20万円

平成22年2月
社団法人 日本遊技関連事業協会
〒104-0033　東京都中央区新川2-12-15
ヒューリック八丁堀ビル2F
電話：03-3553-4333　FAX：03-3553-4334
http://www.nichiyukyo.or.jp/

社会的課題解決にも積極的に取り組む

全日遊連の組合員ホールで掲示されているポスター。家族からの問い合わせもあるという

遊技は楽しい遊び、息抜きだ。娯楽やデート、憩いという目的だけではなくストレス解消で行くケースも多い。とはいえ、『過ぎたるは及ばざるが如し』で、過度ののめり込みは生活の破綻につながりかねない。これがギャンブル依存問題といわれる状態である。

依存問題は個人の体質・気質、ストレス耐性や孤独への耐性、周囲との人間関係など個々人の状況を多角的に分析して判断する。自らが依存状態であると気づきにくいのも特徴。また、仮に気づいたとしてもどこに相談すべきかが分からないという状況が続いていた。

そこで、ホール団体である全日本遊技事業協同組合(全日遊連)が2003年に、「ぱちんこ依存問題研究会」を発足させ、現状把握、分析を開始した。依存問題の実態が明らかにされていない状況からのスタートである。

同研究会の議論をもとに、2006年に全日遊連の支援により第三者機関リカバリーサポート・ネットワークが設立され、電話相談事業がスタートした。現在、全日遊連組合員ホールでは相談窓口のポスターが掲示され、本人だけでなく、家族などからの相談も受け付ける。

2009年10月にリカバリーサポート・ネットワークがＮＰＯ法人格を取得したのを機に、業界全体で支援する機運も高まっており、業界が正面から向き合う形になる。

そして、もう一つの課題がホール駐車場での子供の駐車車両への置き去り。全日遊連が組合員ホールに対して、継続的に駐車場の見回りの徹底を要請するなど、ホール駐車場の見回りの強化などで未然に防いでいる。

ホールが巡回をすることはもちろんだが、メーカーや商社が納品や商談で訪れたときも駐車場の車両に留意するなど、こちらも業界を挙げての取り組みだ。駐車車両の中に子供がいることを発見した場合は店内放送で保護者を呼び出し、事故の危険性を説明し、退店を促すことで事故の未然防止に努めている。

遊技に求めることは人それぞれだ。憩いや楽しさ、あるいは一時のドキドキ、ワクワク、ゲームの中のヒーローに酔いしれるなど、楽しみ方は千差万別である。

しかし、エンターテインメントを提供するメーカー、ホールなどは社会的存在である以上、製品やサービスを提供するほかに、社会的な使命もある。その役割を果たし、いかに楽しい時間を演出できるのか。現代社会は企業の存続条件として、市場での役割とは別に社会的な役割を果たしていくことを求める。遊技産業とて例外ではない。

遊技産業はこれまでにもボランティア、寄付などを積み重ねてきた。このノウハウや経験則を活かして、時代に対応して社会との関係、あるいは企業市民としての活動をブラッシュアップしてきている。今後、社会との対話でさらに企業価値を磨くことが求められている。